

厚田 で輝く！

私たちは厚田で、この夏の開業に向け、牛と地球に優しい牧場の準備を進めています。

もともと私は言語聴覚士、夫はエリベーターの整備士で、二人とも酪農とは全く無縁でしたが、たまたまSNSで牧場経営者と知り合い、直接お話を聞いたり、飼育されている牛と何度も触れ合ったりするうちに、食のことを強く意識するようになりました。以前は「いただきます」と感謝の言葉も伝えていませんでしたが、とても幸せな時間なのだと思われ、牛の命と向き合いたいと思うようになったのです。

夫に相談すると、夫は私がやりたいなら応援すると言ってくれました。そこから二人三脚で情報を集め、各地の牧場を見学し、実際に研修も受け、多くの方に支えられて、ついに自分たちの



地域循環型の酪農を目指して



新規就農者 清野 将樹さん・芽衣子さん

牧場を始めるスタートラインに立つことができました。

目指すのは、地域と共にあって、できる限り自然に負荷をかけず、牛が牛らしく過ごせる地域循環型酪農です。人間と同様に牛にも心があり、心を込めて牛と関わっていききたい、牛乳乳製品を通して消費者の方に牛の優しい心に触れてほしいと願い、牧場は「coco^{ココ}ro dairy farm^{デューリーファーム}」と名付けました。

将来は、酪農教育ファームの認証を取得し、地元の子どもたちが訪れ、石狩の観光促進にもつながるような牧場づくりに挑戦します。この挑戦に、厚田ほどふさわしい地はないと信じています。

ミニトマトで新たな夢へ

新規就農者 佐藤 昌勝さん



サラリーマン時代は朝から晩まで机に向かつて働く日々。だから、子どもが独り立ちしたら、違う仕事がしたいと思い、農業を志しました。

ただ、50歳を過ぎた就農希望者を受け入れる市町村は思いの外少なく、その中で真摯に話を聞いてもらえたのが石狩市でした。

厚田の地で夢をかなえよう！と期待に胸が膨らむ一方で、当初は地元の方に信頼されるまで時間がかかるのでは…と不安もありました。でも、実際はすぐに歓迎してもらい、通りすがりに手を振ってもらうことも厚田の皆さんのフレンドリーな対応に心から感謝しています。

私が手掛けるのはミニトマト。3棟のハウスで2200本の苗を植える予定で、今後は前職のIT企業で培った知識や技術を駆使しながら、高収量を目指し、頑張ります！



厚田を舞台に、夢や希望、情熱を持って取り組む人がいます。今回は、新しいことを始めた人、コツコツ地道に取り組んできた人たちの声をお届けします！

地域の“足” としての使命感

合併後、厚田区地域協議会が立ち上がり、地域の皆さんがいろいろと話し合う中で、特に問題視されたのが、高齢者の移動手段をどうするか、ということだったそうです。そうして誕生したのがあつたライフサポートの会で、私も設立早々にドライバーとして誘われ、すぐに快諾。気が付けばかれこれ15年ほどになります。

もともとボランティア活動は好きな方で、民生委員をやったり、スポーツ推進委員をやったりしていますが、中でもライフサポートの会は、私自身、強い使命感を持って取り組んできたものです。

コロナ禍を挟んで一時、利用者数は減りましたが、最近は商店や金融機関、病院、介護施設などの送迎場所の拡大により、利用者が増えてきています。従来どおり、自宅から最寄りのバス停留所や集会施設、高齢者福祉施設への送迎も行っています。

現在、ドライバーは18人。若い人も入会しているのですが、そろそろ私も引退かな…と思いつつ、まだまだ元気ですし、頑張りたいです。

NPO法人あつたライフサポートの会 千田 恵子さん



挑戦者たち

アートと子どもの遊び場を融合

(一社) AISプランニング
漆 崇博さん



子どもたちに見てもらったり、一緒に創作したりするもので、子どもたちの豊かな感性や価値観を育むことを目的に、全道各地で20年近く開催しています。

2021年9月に厚田学園でも実施し、映像作家の斉藤幹男さんの創作活動を子どもたちに見てもらいました。実はこれが縁となり、昨年から厚田区にある旧市立豊富保育園を、私たちのアート活動の新たな拠点とさせていただくことになりました。

かつての保育園を事務所として活用する一方、今年から「shipple（しっぷる）遊びの実験室」と名付け、毎週日曜は子どもが自由に遊べる場としても開放しています。

私も一石狩市出身者として、アートを接点に何かワクワクするような場づくりを、この厚田で地域の皆さんと一緒にできれば、と期待しています。



私の仕事はアートと社会をつなぐこと。コーディネートとしてこれまで芸術祭の企画に関わったり、アーティストたちとさまざまなコラボレーションを行ったりしてきました。

その一つ、アーティストを小学校へ派遣するアーティスト・イン・スクール事業は、一定期間、アーティストが小学校の空き教室や余剰空間をアトリエやスタジオとして活用し、その様子を